

平成 23 年 6 月 6 日現在

機関番号：12603
 研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19320014
 研究課題名（和文） クメール、チャム碑文資料に基づくシヴァ教の研究
 研究課題名（英文） Study of Śaivism based on Khmer and Cham Inscriptions

研究代表者

高島 淳 (TAKASHIMA JUN)
 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授
 研究者番号：40202147

研究成果の概要（和文）：

チャンパーとアンコールのサンスクリット語碑文のデータベース化を達成するとともに、碑文研究のさらなる深化のための碑文画像データベースも部分的に構築した。それらに基づいて、特にアンコール期の碑文に見られるいわゆるデーヴァラーजा信仰といわれるものが過去の研究者のシヴァ教の無理解に基づく誤った仮説にすぎないこと、その本質はアーガマに基づく初期のシヴァ教のイニシエーション儀礼を即位儀礼と同時に行なうことであったこと、というアンコール王権の革新的理解に導く成果を得た。

研究成果の概要（英文）：

We have constructed an e-text database of Sanskrit Inscriptions of Cham and Khmer, a part of which is linked with photo database of the original inscription images. On the basis of exhaustive text analysis, we have elucidated that the so-called *devarāja* cult is an erroneous hypothesis and its real nature is ordinary coronation ritual combined with the Śaiva initiation ritual based on the early āgamic scriptures.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総計	7,800,000	2,340,000	10,140,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：宗教史 ヒンドゥー教 シヴァ教 アンコール チャンパー 刻文 サンスクリット語

1. 研究開始当初の背景

従来のアンコールとチャンパーの研究は、その基本にインド文明の影響がきわめて大きいことを認めながらも、古い時代のインド研

究の水準に依拠するにとどまっていた。アンコールにせよチャンパーにせよ、その研究の現状はフランスからの独立以後ほとんど進展しているとは言えない。その間に、インド

文献学の分野においては、新たな写本の発見などによってシヴァ教研究が飛躍的な発展を遂げている。アンコールとチャンパーとはともにその宗教文化の中心にシヴァ教を有する文化であり、新たなシヴァ教研究の成果の光の下に照らすことによって従来認められていなかった多くの対応が明らかになることは確実である。

第2に、コンピュータによるテキスト処理技術を活用するべき環境が整ってきたことから、碑文資料のデータベース化によって網羅的読解による研究を推進すべき時期になったことである。チャム文字碑文は二百を越える程度であってそれほどではないが、クメール文字碑文は66年までの収集でも1000を越えているので、網羅的な研究のためにはデータベース化が必要である。わが国における人文系のコンピュータ利用を先導してきたアジア・アフリカ言語文化研究所では、既にクメール語のクメール文字碑文を電子化してある。さらにサンスクリット語碑文のデータベース化を進めることによって総合的な見地からの新たな碑文研究が可能となる。

2. 研究の目的

近年のインド文献学におけるシヴァ教の研究の顕著な発展に基づいて、クメール文字とチャム文字の碑文資料を再読解し、アンコール期を中心とする時代のクメールとチャンパーの文化におけるヒンドゥー教の様相を明らかにすることが本研究の目的である。

具体的には、

(1) チャム文字およびクメール文字からなるサンスクリット語碑文資料のデータベース化

刊行されている主要なチャム文字およびクメール文字サンスクリット語碑文資料を電子データ化して今後の研究の基礎とする。

(2) クメール文字とチャム文字のサンスクリット語碑文資料に見られるシヴァ教のあり方の解明

碑文資料のデータベース化に基づいて、効率的に広範なデータを検索することによって、従来では考えられなかった形での網羅的読解による研究を行なうとともに、近年のシヴァ教研究の進展を活用して、アンコール王朝などの構成要素であるシヴァ教のあり方を解明する。

3. 研究の方法

本研究の実施計画は二つ要素からなっている。

(1) 碑文データベースの整備

具体的には、テキストに関連するものとして、クメール文字碑文とチャム文字碑文の電子化入力を行い、テキストデータベースとして検索を可能にするとともに、KWICインデック

スの作成を行って碑文テキスト校訂者の著作権の問題に抵触しない形にして広く世界の研究者に研究の基礎となるツールを提供する。

更に、既にGICAS（アジア書字コーパスに基づく文字情報学の構築）プロジェクトにおいて着手したチャム文字碑文の画像データベースの構築を進めるとともに、クメール碑文画像データベースの構築のための碑文画像の撮影を進める。

これに伴って、予算の許すかぎり、碑文の記述内容と遺跡遺物の対照研究のために、アンコールとチャンパーの文明の遺跡の実地調査を行う。

また、上記のうちのチャム文字碑文処理のために、チャム文字処理ツールの作成も進めた。チャム文字についてはまともに使用可能なフォントすら存在しないために、研究を進めるにあたって様々な困難が伴う。これを解決するために、METAFONTを用いてチャム文字のフォントを作成し、作成したチャム文字フォントに基づいてTeXのチャム文字処理システムを作成する。

(2) 碑文に見られるシヴァ教の研究

データベースを利用した網羅的な出現例の検討に基づいて、チャンパー及びアンコール期クメール文化におけるシヴァ教を中心とするヒンドゥー教の様相について、最新のインドでのシヴァ教の研究の進展と対応した研究を進める。

4. 研究成果

(1) 碑文データベースの整備

テキストデータベース関連ではチャム碑文についてのMajumdarのテキストの入力と、クメール碑文についてのInscriptions du Cambodge全7巻のサンスクリット部分の入力を終え、クメール碑文のサンスクリット部分についてのMajumdarのテキストの全体の入力を終えている。Inscriptions du Cambodge全7巻のサンスクリット部分のKWICインデックスを構築し、下記[その他ホームページ:URL]公開しているので、今後のクメール碑文研究にとっての基礎的ツールとなるであろう。これによって、公刊されているサンスクリット語碑文のテキストの大部分について容易に検索できるようになった。

チャム碑文の画像データベースの試作バージョンも同じURLから公開している。今後順次クメール碑文の画像データベースも公開していく予定である。

チャム文字のフォントとそれに基づくTeXシステムについても試作バージョンを同じURLから公開している。

(2) 碑文に見られるシヴァ教の研究

上記のようなデータベースに基づくシヴァ

教の研究を進め、特にいわゆるデーヴァラージャ信仰について、過去の研究者のシヴァ教の無理解に基づく誤った仮説にすぎないことを十分に証明し得るような研究成果を得た。

まず第一に念頭に置いておくべきことは、過去の研究者のラテライトに関する常識の欠如であり、ラテライト・ブロックが地中から掘り出して空気に触れさせるだけで土から石に化学変化を起こすことを認識していない無知な研究者が、あれだけのアンコールの建築を作るためには特別の権威を持った王権が必要であろうという仮定をたてて全てを解釈していたということである。実際にはアンコールの建築材料の90%は現地で掘り出した土が変化したブロックを使っているので必要な労働力は従来の仮定の十分の一程度であろう。

こうした誤った認識からデーヴァラージャという言葉が「神王」として勝手に解釈され特殊な宗教的王権が成立したとされてきた。冷静に碑文データを読むと、デーヴァラージャという言葉の出現はサンスクリットのクメール碑文全体で5回しか現われない。そのうちの3回が Sdok Kak Thom 碑文である。そして残りの2例はこの言葉のインドでの普通の用法の示す意味である「神々の王」としてのインドラのことを意味している。

こうして新しい視点から鍵となる Sdok Kak Thom 碑文を読み直してみると、ここでのデーヴァラージャという言葉が「成就法」にかかっており、さらに「水の流れ」と等値されていることからインドの王の即位儀礼である「インドラの大灌頂」(aindra mahā abhiṣeka)と呼ばれるものを差していると解釈するのが最も自然である。

ただしそれだけではこの儀礼に特別な重要性が与えられたのかは明らかにならないが、この碑文のクメール語部分と合わせて精査すると、bhuvana (世界)の階梯を手段とするディークシャーというシヴァ教のイニシエーション儀礼を同時に行ない、そのことによって王が死後にシヴァ教の保証する上位の世界に生まれ変わることを保証する儀礼を即位儀礼と同時にこなしていたであろうことがほぼ確実であり、そのことが王たちの死後の贈り名によって確認できることが明らかになった。

その際に用いられたシヴァ教の経典が、Nihśvāsa と称される最古の層に属するシヴァ教のアーガマであることも、引用されている経典名の解釈によって推測できる。

このような研究は、従来のアンコール王朝の性格に関する定説を覆す革新的な理解を提供し、今後の研究をまったく別の視点から推進させるようになる大きな成果である。

最後に、注目すべきこととして、これらの儀

式を司った祭司の家系において、女系で相続していることが明らかなことである。ところが、この相続方式が王の相続についても確認できるかどうかに関しては、従来の研究が存在していない。残念ながら本研究の期間内ではこの点についての研究を進めることはできなかったが、今後この点についての研究を進めると、従来のアンコール王朝についての考え方をまったく改める必要も出てくると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 高島淳「碑文の声を聞く」、『フィールド+』第5号、査読有、2011.1.24, pp. 10-11
- ② 佐藤大和・峰岸真琴「多次元アノテーションに基づく多言語分析ツールの構築」『情報処理学会研究報告』2011-CH-89, 査読有、2011.1.22, pp.25-40
- ③ Minegishi, Makoto, Takashima, Jun and Ganesh, Murmu, 'On the narrow and open `o' contrast in Santali', *Papers for Presentation at the 32nd All India Conference of Linguists, University of Lucknow*, 査読有、2010, pp.121-125
- ④ 高島淳「マルセル・モースとシルヴァン・レヴィ」、『月刊百科』第570号、査読無、2010.4.1, pp. 14-19
- ⑤ Minegishi, Makoto, 'Development of Electronic Dictionary for Analyzing Linguistic Data', *Proceedings of Chula-Japan Linguistics Conference 2008*, 査読有、2009.3, pp.11-16
- ⑥ 峰岸真琴・赤木攻『『コーパスに基づく言語学』プロジェクトにおける電子辞典開発――タイ語を例に――』峰岸真琴、川口裕司(編)『コーパスに基づく言語学教育研究報告3 ― フィールド調査、言語コーパス、言語情報学』, 査読有、2009.5.15, pp.183-194
- ⑦ 峰岸真琴「孤立語の他動詞性と随意性：タイ語を例に」角田光枝、佐々木冠、塩谷亨編『他動性の通言語的研究』, 査読無, pp. 205-216, 2007. 11. 26.

[学会発表] (計 4 件)

- ① 佐藤大和・峰岸真琴「多次元アノテーションに基づく多言語分析ツールの構築」情報処理学会人文科学とコンピュータ部会報告、2011.1.22, 総合地球環境学研究所
- ② Minegishi, Makoto, Jun TAKASHIMA and Ganesh MURMU "On the narrow and open `o' contrast in Santali", 32nd All India Conference of Linguists, 2010.12.21, Lucknow University, India

- ③ 高島 淳 「いわゆる devarāja 信仰は実在したか？」「インドにおける宗教的空間の象徴性に関する学際的研究」研究会, 2010. 2. 6, 金沢大学サテライトプラザ
- ④ Osamu AKAGI and Makoto MINEGISHI, 'Bridging ASEAN with Lexicology', *CU ASEAN Conference*, 2008.8.4, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand

[図書] (計 2 件)

- ① 高島淳 『『供犠論』とインド学』, モース研究会 (編) 『マルセル・モースの世界』 (平凡社新書), 2011.5.13, pp.89-113,
- ② 峰岸真琴 「孤立語の他動詞性と随意性 : タイ語を例に」 角田光枝, 佐々木冠, 塩谷亨編 『他動性の通言語的研究』 くろしお出版, 2007.12.7, pp.205-216

[その他]

ホームページ

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/khmercham/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高島 淳 (TAKASHIMA JUN)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号 : 40202147

(2) 研究分担者

峰岸 真琴 (MINEGISHI MAKOTO)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授

研究者番号 : 20183965

澤田 英夫 (SAWADA HIDEO)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授

研究者番号 : 60282779